

## 水土里レポート 投稿様式

|           |                           |
|-----------|---------------------------|
| 投稿月日      | 令和7年9月17日                 |
| タイトル      | 疏水フォーラムin広桃用水2025へ参加しました！ |
| 水土里レポーター名 | 水土里ネット福山 佐々田 愛            |

令和7年9月3日（水）、4日（木）に群馬県前橋市において「疏水フォーラムin広桃用水2025」が開催され参加しました。

疏水とは新たに土地を切り開いて水路を設け通水させることで、先人が2千年にわたって築き上げてきた疏水は国内だけで延長約40万kmになり、古来からその集落に住む人々の共同作業によって維持管理されてきました。

疏水は、食糧生産のみならず国土や生態系の保全など人々の暮らしに深く関わっており、前橋市においては疏水を核とした街づくりが行われております。

3日は、前橋市の日本トーターグリーンドーム前橋において全国の水土里ネットから約500人が参加し基調講演、講演、対談が行われました。

開会の挨拶の中で「疏水を知らない人が多いが、その知らない人々を含めたすべての人々の生活を支えているのが疏水であり、その役割を担っているのは土地改良区と言っても過言ではない。」という言葉に土地改良区の関係者として共鳴しました。

基調講演では、農林水産省農村振興局整備部水資源課長の瀧川拓哉氏が「疏水をとりにくく情勢について」と題して講演され、「日照りに不作なし、日本は稲作に向いている」とよく言われるが、これは全国に疏水があり綿々と維持管理を行ってきたからこそ言える事で、今日の気候変動による高温、頻発化・激甚化する災害の対応は急務であり、将来予測に基づく計画策定手法を策定された事や農業従事者の減少や高齢化の対策として、畦畔を拡張し傾斜を緩やかにしてリモコン草刈機などの作業がしやすくなる省力化・省人化の事例をお聞きし、スマート農業の取り組みが必要となっていることを改めて感じました。

つぎに「疏水の新たな価値の創造にむけて」と題し、前橋市の中心市街地を流れる馬場川を再活用し遊歩道公園を再整備する「馬場川通りアーバンデザイン・プロジェクト」の財団設立による支援の㈱ジンズホールディングス代表取締役CEO 田中 仁氏とデザイン統括の㈱ランドスケープ・プラス代表取締役平賀達也氏が対談され、この取り組みは地元有志の寄付金による民間の資金で行われ行政と管理面の問題点などの協議が難航する中、公共空間の民間整備と市民自治による管理運営を担える仕組みが構築されており、街づくりに官民のトッププロが集結されております。

夏の暑さが有名な前橋市では水路が冷却装置の役割があるとお聞きし、翌4日、市街地の水路を訪れ、豊かな水の流れや柳などの緑が涼しい印象を与えていることを実感しました。



馬場川



広瀬川

つぎに、群馬地域学研究所代表理事の手島 仁氏が「広瀬用水の歴史」と題して講演され、前橋市の地形など映像を使って分かりやすくお話してくださいました。

広瀬用水は、江戸時代に利根川の分流により広瀬川となり、農業用水のみならず城下の生活用水や舟運にも利用されました。近年には、水車、製糸、発電養魚に利用され前橋の発展を支えております。

豊かに流れる広瀬川の護岸には桜や柳の木が植わり市民を和ませ、前橋市のキャッチフレーズである「水と緑と詩のまち」の象徴的な存在となりました。

つぎに、「広瀬川対談～市街地を流れる排水管理～」と題し、宮城県の仙台東土地改良区事務長 菅野 司氏と広瀬桃木両用水土地改良区事務局長 小池俊也氏が対談されました。

仙台市の「広瀬川」と前橋市の「広瀬川」の繋がりでこの対談が実現したもので、両市の都市化による浸水被害を防ぐため排水機や樋門の維持管理に苦慮している事や仙台市では東日本大震災で自らが被災される中、壊滅的状况から復旧・復興にご尽力された体験などをお聞きしました。

両土地改良区は平地で勾配が緩く以前は田んぼが広がっていた場所が都市化により住宅地になっておりますが、広範な地区内の排水機の維持管理に係る費用など治水に対する負担が大きくなっており、用水路にWebカメラなどを設置して遠隔監視・操作を可能にし、スマートフォンからカメラ確認や操作を行うことができるよう施設を更新し維持管理の負担軽減に努めておられます。

広瀬桃木両用水土地改良区の農地や組合員が減少し経常賦課金が減収する中で太陽光発電や小水力発電の導入により賦課金を上げない努力や施設の維持管理の人材確保に繋がるよう地元高校生へ老朽化した水路の目地補修の授業を行っていることなどの取り組みをお聞きしました。当日のフォーラム会場には、この授業を行っている地元高校生が約20名参加しており、土地改良区や排水について興味を持っておられることに感銘しました。

水土里ネット福山でも都市化により農地減少が進む中、今回のフォーラムでお聞きした排水に関する様々な取り組みは大いに参考になるものと考えており、21世紀土地改良区創造運動を通じて、子ども達や若い世代、広く一般の方に排水や土地改良区の役割を理解いただける活動に繋げていきたいと感じております。

4日は、広瀬用水の施設を現地視察しました。

広瀬桃木両用水土地改良区の取水口は利根川左岸にありましたが、昭和22年、23年の水害により取水施設が破壊され取水不能となりました。利根川右岸から取水していた天狗岩堰土地改良区の取水口も同様に破壊されたため坂東大堰土地改良区連合を設立し、新たに共同の取水口となる坂東大堰合口を建設されました。利根川を横断する堤頂長200mの坂東大堰は、大規模な施設と豊かな水量で圧倒されました。

広瀬川と端気川を分水する「十六本堰」は、16世紀ごろ分水のために構築された堰杭が16本あったことが名前の由来で、世界遺産の富岡製糸場をイメージしたレンガ調の外観で住宅街の景観に配慮されています。

その他にも豊かな水量を利用した水力発電所や導水路の暗渠の土地を利用した太陽光発電の施設など、規模の大きさと先進的な取り組みに驚きました。



圧巻の坂東大堰合口、堤頂長200m坂東大堰



外観レンガ調の十六本堰

今回の排水フォーラムでは、従来の排水の役割のほか、治水や排水を核とした街づくりなど多様な活用状況をお聞きし、フォーラムの冒頭に話された「排水の在り方が変わる時代にきている」という言葉を実感しました。

水土里ネット福山でも、農業用水の安定確保はもとより、排水を次の世代に引き継いでいく取り組みが求められていることを痛感いたしました。